

## ダンスとつながる ダンスでつながる

## スクール・オブ・ダンスプロジェクト

### 2014 年度 活動報告

スクール・オブ・ダンスプロジェクトが主催する「ダンス教育ラボ」の2回目。ラボトークでは、アート教育に関わるアーティスト・教育者・研究者が集い、アーティストが生み出すダンス教育の可能性について、多角的な視座から語り合った。

#### ダンス教育ラボ vol.2

ラボトーク／ヨコハマアートサイトラウンジ vol.4

2015年1月25日(日) 18:15～20:00 於：かなくホール

登壇者：瀧澤優子(横浜市立西寺尾小学校 校長)

太田早織(神奈川大学人間科学部人間科学科助教)

川合ロン(ダンサー・振付家／Co.山田うん)

宮内康乃(作曲家／つむぎね主宰)

楠原竜也(振付家・ダンサー／「APE」主宰)

司 会：岡崎松恵(スクール・オブ・ダンスプロジェクト 代表)

**岡崎**：近年学校教育では、子どもたちの「生きる力」を育てることをねらいに、表現運動系つまじダンスが非常に注目されています。横浜市は2004年からアーティストによる学校プログラム「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」(\*)を実施して、私も自身もコーディネーターとして活動しています。教育現場で子どもたちを目の前にして、いかに幸福なダンスの出会いをつくり広めていけるのかを考えて、2012年に若手ダンサーとともにアート教育に特化したチーム「スクール・オブ・ダンスプロジェクト」を立ち上げました。2日前には、この会場で西寺尾小学校の子どもたちが出演した「キッズダンスシアター」を実施しました。本日のダンス教育ラボでは実践的なワークショップも行われましたので、このラボトークでは、キッズでの活動も踏まえ、みなさんと一緒にアーティストが生み出すダンス教育の可能性や課題を一緒に考えていきたいと思います。

それでは、まず、太田早織さんから、学校教育におけるダンスについて基礎的なお話を伺います。体育におけるダンスのあり方を研究されている、高等学校の教員を目指す学生さんを教えていらっしゃいます。

**太田**：日本の学校教育では、ダンスが保健体育の中に位置付けられていますので、体育科の歴史的な変遷からお話します。「体育」という教科名は、「身体の教育」から来ていて、戦前・戦中は身体をつくることが重視されました。その頃は、唱歌遊戯という表現系の運動もありましたが、体育全体が身体を作る／鍛える、例えばピッチや笛を鳴らしたら右を見る、というような一斉運動が主だったので、今で言う広い意味でのダンスではありませんでした。戦後体育は軍事色の払拭が目指され、情緒面の教育が強調されダンスも積極的に取り入れられましたが、結果的に子どもたちの体力が低下してしまいました。そこで、東京オリンピックを契機に子どもたちの体力を上げていかなければいけないという方向へ一気にシフトし、体育の授業も転換する。その後やはり体力を高めるという必要充足の部分だけに終始する授業のあり方への問題意識から、運動文化を重視す

る時代に移行します。脱工業社会が背景にあって、「生涯スポーツ(Sports for All)」という概念が生まれ、体育教育においてはダンスの運動的部分だけでなく文化的な価値が重視される様になりました。

現在は、健康を保持増進し体力を育成する為の技能や知識を身につけつつ、運動そのものが持つ楽しさや喜びを味わわせることを育成することが体育全体の目的となっています。体育の中におけるダンスにおいても、体力とダンスの楽しさを体験させるために、現場の先生がこのバランスをどのように取るのかを苦心しています。

このように、ダンスは体育の歴史の中で、情緒的側面、体方面、運動の文化性というように、時代に合わせて内容をえてきました。現在学校で行うダンスとしてはフォークダンス、現代的なリズムのダンス、創作ダンスの3つが示されています。

小学校では、低学年では表現リズム遊び、高学年ではリズムダンスと表現運動で、創作的なものやフォークダンスも加わります。中学校では、先に述べた3つの中から一つを選択することになっていて、小学校までに色んな側面を経験するという学習内容になっています。

**岡崎**：瀧澤優子さん、西寺尾小学校においてはいかがでしょうか？学習指導要領のもとで行っているダンスの取り組みをご紹介ください。

**瀧澤**：体育の枠組みでは、担任が表現活動を指導します。運動会では、一定の曲を決めて、既にある振付をみんなで一緒にリズムにのって揃えて踊るというのがあります。その他に、集会で一定のリズムをもとに子どもたちが創作して全校で踊るという取り組みも行っています。

**岡崎**：西寺尾小学校では3年にわたってダンスカンパニー「Co.山田うん」がダンスワークを実施しています。最初は、2012年横浜市のダンスのアーティストフェスティバルの一環で、横浜市の体育の実技発表会で同校の1年生が発表する表現を支援するプログラムで10回の授業を行いました(笑)。アーティストが行うダンスワークをどのように捉えていらっしゃいますか？

**瀧澤**：実技発表会では、国語学習「じらぐも」をテーマに表現活動を楽しませたいということになりまして、少しでも子どもたちが恥ずかしくならず自分の身体を使って思いっきり表現できたらいいね、ということでこのプログラムに応募しました。担任の、子どもたちとのコミュニケーションはとれていても、やはり子ども同士の間関係で、「何をしても許されるし認めてくれる」という温かい雰囲気や学級でないと、いくら「身体を使って表現しよう」と言っても、動かしめるのではないですよね。身体は心と結びついているところがありますから。

この三年間 Co.山田うんのダンスワークのたびに子どもたちを見て強く感じることは、ダンスを教えるのではないということです。まず、「わー！」「と、腹の底から思いっきり声を出す。普段そんなふうには周りを気にせず、思う存分、大きな声を出さなくてもいい。ダンスを教わるのではなく、自然に心が弾んで踊りたくなっちゃう！そういう経験を子どもたちに提供してくれたことが私は素晴らしいと思いました。教職員もアーティストと子どもたちとのやり取りを見て、心が解放される一瞬一瞬がかけがえないことを改めて学びました。

**岡崎**：川合ロンさんは Co.山田うんの中心メンバーですが、西寺尾小学校の5年生の51人の子どもたちが出演するキッズダンスシアターの演出を手がけました。昨年は学校主催の芸術鑑賞会にも呼んで頂いてパフォーマンスを上演したので、みんな覚えていて、互いの信頼関係のもとで素晴らしい公演になりましたね。主宰の山田うんは、ダンスのアウトリーチの草分け的な存在です。本日のワークショップでも公開された川合さん

の手法は、カンパニーのメソッドの一部ですか？

**川合**：メソッドが明確にある訳ではないのですが、山田うんのワークショップのアシスタントとして経験を重ねる中で、どういう時にどうい言葉をかけているか、どんな曲をかけてスタートしているか、何をそこで言わなかったかとか、などを学びました。子どものワークショップでは、Co.山田うんで長く作品づくりに関わっているメンバーがリーダーになって、チームで行っています。今回は小山まさしと広末知沙がアシスタントとして参加していました。

**岡崎**：いくつか印象的なキーワードがありますね。「あいこのダンス」とか。

**川合**：じゃんけんを真似っこみたいなことから始めて、最初は普通のルールでやるんですが、今度は負けた方が勝ち、次はあいこが勝ちというようにルールを変更していきます。リーダー対みんなで、僕がグーを出したらみんながグーをだす、チョキを出したらみんながチョキを出す、みたいなことからそれを段々曖昧な形に発展させていって、ダンスが優秀のつかないものだということを示していきます。子どもたちを日常から離れた土俵に乗せるために使っています。あと、「適当」という言葉もポジティブな意味で使っています。「今から適当！適当に動いて！」みたいな。真似しなきゃいけないってテンパってる子をほすことも必要なんですよね。中には、打ち解けられずに端っこに座っていたりする子もいるのですが、教室から出て行かなければいいかなと。許容の態度を持ちながら、適当ダンスのときに関われればいいなと思っています。

**岡崎**：楠原竜也さんは、ワークショップ@の講師を務めていただきました。熱心に教育活動に取り組んでいることは知っていましたが、教員免許をお持ちだと聞いてびっくりしました。何がきっかけだったんですか？

**楠原**：僕は大学が演劇専攻で、身体に興味をもつてコンテンポラリーダンスを始めましたから、両ジャンルを横断するような活動をしています。10年くらい前から子どもとのワークショップを始め、分からない事だらけで、先生や子どもたちのことを理解したいと思ったんです。もともとは、幼児教育に関心がありました。イタリアの幼児・児童教育研究機関「レッチョ・チルドレン」は、幼稚園に日常的にアートを取り入れていて、「アリエスタ」と呼ばれるアーティストが子どもたちの創造表現活動を行っているんです。ただ、実際のワークショップは小学生が多かったので免許を取りました。それで、自分は教育者よりも、表現を通して子どもと関わってきたいんだということが明確になりました。

**岡崎**：そうすると、担任の先生に対しても特別な視点をお持ちなのでは？  
**楠原**：頭が上がりません。なので、外部の人間だからできる部分を伝えるようにしています。

**岡崎**：今日のワークショップでは「導入」をテーマにしていますが、普段はどのような内容でやっているんですか？

**楠原**：大事にしていることは、コミュニケーション、相手との関係性の部分です。相手との身体的な接触やアイコンタクトを用いながら、あるルールの中で自由に動いていくという内容です。ダンスといえばダンス、だと僕は思っています。

**岡崎**：宮内康乃さんは、本日のワークショップで初めて拝見しましたが、身体そのものが楽器であるという発想は、どこからきたのでしょうか？

**宮内**：私は大学で西洋音楽の作曲を勉強し、その後大学院でメディアアートを学びました。そこでデジタルの音に違和感を持つようになりました。



それまで西洋音楽という枠組みの中での発想しなかったことにも気づき、「じゃあ音楽って一体なんなんだ」という根源的な問いでも立ち戻り考えました。その末に、最もプリミティブな、人間の身体を通してコミュニケーションをする為に音があるということに気づきました。それ以来、楽器もない単純なルールだけで、その場で互いにコミュニケーションすることによって新しい音楽を生み出すという方法に辿り着きました。しかも、人間の身体から出る「声」という、一番身近でひとつとして同じものがない「楽器」を使って、聴いて下さる方から「自分もやってみよう」との声を多く頂いて、プロアマチュアも老若男女関係なくみんなと一緒に音を出してひとつの響きに調和していくようなワークショップを始めました。

**岡崎**：アーティストの方法論は、実際にクリエイティブで教育現場でも有効だと思われれます。実は太田さんとお会いしたときにアートとしてのダンスと体育としてのダンスには距離がある、という話がありました。現場の教師が教えられるレベルを探っていく必要があるとお考えですか？

**太田**：小学校の先生はそもそも専門が体育ではない方もたくさんいらっしゃいますので、ダンスの授業ですらとも一緒に何か真似たりすることを心から楽しんでいらっしゃる先生と、やらざるを得なくて何かやっているという先生がいらっしゃいます。経験があまりにも不足過ぎる為に指導法を基にそこに書いてある過程をそのままやってみたり、そういうことが沢山起こっています。特に中学校では2012年度から施行された新学習指導要領により武道とともにダンスも必修になったので、教師は本当に苦労されています。先にお話したフォークダンス／創作ダンス／現代的なリズムの3つから選択する時に、教師自身が何かできるものだけを教える、又は代々学校が扱っているものを誰かしらできる人が担当するなどの現状があります。そういう意味では、指導書を越えた情報の共有が重要だと思います。沢山ダンスを生み出してきているプロの方々から、いかに子どもたちの心を開いてゆくのかを先生が体験的に掴むことができたら大きなヒントになると思います。もうひとつ、先生方が一番困っているのは、そうした表現活動における評価のあり方です。

**岡崎**：瀧澤さんは、表現活動の評価についてどのようにお考えですか？

**瀧澤**：教師は一時間の授業づくりの過程を通して「指導と評価の一体化」を図り続けています。評価の観点に基づいた具体的な評価規準をもつて、評価します。プロのアーティストによるワークショップは、評価計画や具体的な評価規準で子どもを評価する訳ではありませんが、限られた教時間という活動時間の中で、十人十色の感性・個性をもつ子どもたちを一気にダンスという楽しい満の中に巻き込み、一人ひとりを輝かせています。そこには、評価観点・評価規準を越えるような計り知れないものがいっぱい秘められている気がするんです。私は、子どもたちの出会いには、何一つとして無駄はないと個人的には考えています。一瞬、いや教時間のお会いや経験が、もしかしたら子どもたちの可能性の扉を大きくノックするかもしれない、学校の年間カリキュラムや予算等との兼ね合いはありますが、できうる限りいっぱい出会わせてあげたい。プロアーティストの出会いで、この子がこんなに変わるんだということを目の当たりにするのは、沢山あります。たとえば、今回キッズダンスシアターを実施した5年生の中に、教室で話したり、手を挙げ、皆の前で自分の意見を言うことが少ない男の子がいました。別にいじめられている訳ではないのですが、心に思うことがいっぱいあっても、表現できず苦しい思いをしているんですね。今回の公演の中で、舞台中央で一人ずつ踊るシーンがあったのですが、その子がぐるぐる回って中央に出てきて、最後は決めポーズを自分でその場



所にノリノリで戻っていきました。言葉はいらないんですね。その姿を見られただけで、充分なのです。たった1人でもそういう子がいてくれたなら、この出会いは本当に宝だなと思いました。

また、地域の方々も来てくれて、75歳を越えた方が、「俺、全然わかんなくて、あれはストーリーがあるのかなぁ。」「でも、あの創作ダンスはすごかった」と感動してらしてパワーをもらったと声をかけてくださいました。



写真：キッズダンスシアター vol.3で川口白口と隣も西暦年の子どもたち かなっくホール

**岡崎**：それはとても嬉しいですね。瀧澤さんはいつも「ああ、よかったわ!」と言って下さるので、私たちはダンスの力を信じていることができる、って思えるんです。ところで、アーティストも授業を実施する中で子どもたちから沢山のものを得ていると思います。そのことは個人の創作活動にも影響があると思うのですが、アーティストが学校でアウトリーチをやるこの意味について一言ずつ頂きますか？

**楠原**：僕らが考えつかない動きやアイデアが出てくるのは目から鱗ですね。同じシンプルルールでも、「そう動くんだ」という発見があります。年齢の発達程度があり、その年齢だからそそ出てきた動きや言葉は繊細でキラキラしていて毎回ドキドキさせられます。あとは、ワークショップをしていく中で、自分の一番やりたいこと、伝えたいこと、表現したいことが何かを再確認できました。結局僕にとってダンスはコミュニケーションで、人と関わってできるものに興味があるという結論に辿り着きました。

**宮内**：私の行うワークは内に入っていく側面が強いのですが、子どもだから集中力が続かないかなと予想している与实际そんなことはなくて、ものすごく小さな音で繊細に表現することも本当に小さな子どもでもできますよね。子どもってやっぱりすごい。彼らはこちらが本気でやればキチンと受け止めてくれるし、内容が良くなければ集中力が切れたりとか、自分のやっていることが全て鏡として返ってくる。芸術を極めて美しいものを作るということも勿論大事なことかもしれませんが、ワークショップで子どもたちが生き生きと音を通して楽しんでくれる場を作れたときに、音楽をやっていると本望だなと感じます。

**川合**：誤解を恐れずに言えば、伝えたいものは特にないという言い方になります。教える、伝えるというスタンスで行ってしまうと子どもたちと距離が生まれちゃう。だから、自分はほんの少し先を歩いている先輩として彼らにキッカケを与えているというだけで一緒に泥んこになって踊れる位置にいることが大前提にあります。自分はダンサーで何かを持っている訳ではなく、先生達のようにしっかしっていない。その子どもたちと同じような発想で、ここまでっちゃけられる大人もいるよ、と子どもたちに示せます。先生は教える立場にあるので、その枠組みの中ではできないこともあると思うんです。外部から来た大人の大人がお尻を振ったり、変なポーズをしたり、そういうのは僕らの立場だからできる。それはアーティストだから、というのではなくて一過性の存在だから。僕らはそういうカードが切れるチ

ヤンスを持っていると思います。

**岡崎**：確かに。私の学校での活動は年間20日にも満たないのです。そういう意味では、現場の一回一回が正念場だと思っています。ダンスは先生が表現に関して苦手意識もあって、自由に授業を組み立てることが比較的できるのですが、音楽は教科にありますから、結構葛藤があるのではないですか？

**宮内**：どうしても西洋音楽ベースになってしまうので、技術と音楽的素養、リズムがとれるとか音感がいいとか楽譜が読めるとか、それがないとまず音楽自体が成立しない。優劣がでてしまう現状をすごく問題視しています。学校の現場に音楽の先生はいらっしゃるし、西洋音楽しか知らずに教員になっている方が多いので、「一応鑑賞はやりますよ」というケースが殆どではないでしょうか。日本人独特の音の感覚やそれぞれが持っている音の意識も私はすごく大事だと思っていて、もう少し音楽の先生自身が新しい発想に開いていければと思います。私がやっているような活動も音楽としてありなよだということをもっと知って頂けると嬉しいです。

**岡崎**：ダンス的には大アリです。ダンスと音楽を融合して何か新しい方法を開発できるのではないかと思います。川合さんは初顔合わせでしたが、一緒にやってみていかがでしたか？

**川合**：かなり面白かったですね。というのは、僕たちのやっているスタイルは結構音楽に頼ってしまうんです。その音楽をしかもIpadでかけるので、機械化された音になります。大音量で子どもたちがノる利点もあるのですが、それだけでは成立しない間(ま)とかがあります。ミュージシャンの方が一緒にいたり、音楽のワークを同時並行でやっていると、その間に対してここから言葉でつなげてみよう、とか違うチャンネルにスムーズに移行できるようになる気がしました。それによって子どもたちは違う発見ができると思いますし、このかなり贅沢な試みを大人やダンサー同士でやってもいいかもしれない。宮内さんの選ぶ言葉には中毒性があるというか、ロザさみたくなるし踊りたくなるのが良いなあと思いました。

**宮内**：今日はなんの用意もない中で、あんなにすんなり融合できるとは。私もすごく感動しました。私たちのワークのコンセプトは、互いに影響を与え合ってみなで一つの音空間を作ることを重視しているのですが、私たちの音によってダンサーが逆に踊らされているみたいな、あるいは身体の動きに合わせて私達が音を変えてみるとか、色々な可能性がありそうです。今まで私は一人でワークショップをやるが多かったのですが、ダンスと音とでより多角的なアプローチを考えられるとすごく面白いなと思いました。是非、やりましょう。

**岡崎**：自身自身の問題でもあるのですが、コーディネーターも専門分野以外をあまり知らないということが課題だと感じました。それから、最近異なるジャンルのアーティスト同士のコラボレーションが多いのですが、初めて組むのは非常にリスクがある訳ですよね。身近なところから一緒にワークをして共通点を探しつつ、子どもたちと一緒に作業することで相互理解が深まって、その先にコラボレーションするのが理想的だと感じます。それでは、客席からご意見や質問などいただければと思います。

**Q**：瀧澤先生に質問です。私が別のフォーラムに参加したときに、小学校の先生からダンスの良さや効果については重々承知しているけれど、学校のカリキュラム上、自由なダンス表現の時間の確保が非常に難しいとおっしゃっていました。小学校では運動会で踊るダンスに時間が割かれている現状があると、西寺尾小学校では、アーティストによるダンスの授

業をどのように時間を確保なさっているのか、苦勞する点などございましたらお話いただければと思います。

**瀧澤**：ワークショップの時は体育でとっています。体育の年間時間は各学年決まっていますので、その中でやりくりをしています。そうでもない、となかなか難しいのが現状だと思います。今回キッズダンスシアターでは5年生の時間を当てましたが、体育の時間だけでなく、特別活動や総合的な学習の時間としての内容を明確にし、学校として検討して時数を計上しています。

**岡崎**：授業は通常45分間ですが、キッズの公演前日の授業では60分に拡大していただきました。実際、キッズでは公演後に子どもたち主導の振り返りがあったり、学校とかなっくホールの往復で電車移動もありましたし、ダンスを入口に広い見地での学習の機会と捉えていたと感じました。

**瀧澤**：給食と一緒に食べていただいたり。

**岡崎**：そうですね。それで4時限目を授業を入れたり。給食苦手なアーティストもいるんですけど(笑)。でも次の授業の雰囲気は随分変わります。

**瀧澤**：そういったアーティストの方とのつながりも表現活動にはとても重要で、子どもたちの心の解放に役立っています。授業数確保に向けて、それなりに苦勞はあるのですが、それにも増して、価値があると本当に強く感じています。

**Q**：皆様のお話を聞いていて、アーティストが学校に行って子どもたちと触れ合うことの価値については、みなさん共通認識をお持ちだと思います。一方で、体育という授業の中におけるダンスでは評価指標を考えざるを得ないという現実があり、アーティストは多様な価値観や自由な発想を伝えようとしている、その両者のせめぎ合いがあると推察するんですね。そもそもダンスを体育という授業に位置付けることが相応しいのか？もし仮に馴染まないという考えをお持ちだとするならば本来どうあるべきなのか、ご意見があればお聞かせください。

**瀧澤**：きっと先生が一番戸惑っているのかもかもしれません。体育が否かというより、とにかく子どもと一緒にになって、先生も動いてみる！夢中になって思いっきり動いていこうに子どもも大人も楽しさの渦の中に入っていく。最終的にはダンスの活動を通して、ちょっと自分に自信をもち、なんだか自分が好きになっていく。根底に自己肯定感があることは、必ず遅く生きたりとなっていくことは間違いないと思います。ダンスが体育が否か・・・体育だから評価ではなくて、子どもたち一人ひとりの全人格的なものもすごく大きく変わってくるし、一つの自信をもち、国語でも音楽でも教科等の別なく、自分を表現することにためらうことがなくなっていく、そういう力がええない力になっていくという意味で考えています。子どもたちが生きがい、感じる、つくる、生きる、そういうパワーにつながっていくことは何よりも大事なことだと思います。

**岡崎**：学校の先生と一緒にやるのは結構大事ですね。子どもたちはすごく嬉しそう。先生にとっても、アーティストの方法論を体験的に掴むことができると思います。

**Q**：学校や子どもたちと関わるアウトリーチだから気をつけていることがあれば教えてください。

**楠原**：僕は事前にしっかし先生方と打ち合わせます。先生方や子どもたちの様子色々伺って、先生の希望、僕のできること、一緒にやりたいことを話し合って、多少の関係が出来上がるように気をつけています。ただ知っていたほうがいい反面、知らないから先入観なく子どもたちと向き合えることもある。色々想定していくんですが、実際に子どもたちと出会った

瞬間にああこうね、じゃあこう出たらどうなるかなみたいな、良い意味での動物的感覚で対話している感じです。

**宮内**：担任の先生と子どもたちの関係性がある中に入っていくので、配慮すべき点はいろいろあります。先生の関わり方という、担任のやり方に則った上で、私のやることで子どもたちをどこまで自由にあげられるかを考えます。中には、きちんと静かに聞きなさいってすごく厳しく先生もいて、逆に子どもたちの自由な遊びの感覚が抑えられちゃ勿体無さもある。反抗的な子ども、実はすごくやりたかったり。ある程度気は遣うけれども、外側の立場だからその利点を活かして自分なりに向かって行ければいいのかなと思っています。

**川合**：アウトリーチは、そもそもやる気がない子もいるという前提で考えます。授業時間の45分間、ないし90分間、引っ張っていかなきゃいけない。舞台上で言うと、興味ないお客さんの前で即興で踊って引きつっ続けられるかどうかみたいな。毎回大変な思いをしながら、がーんと思ったり。Co.山田うんのダンサーの共有認識としてあるのは、華というか、本当に魅力ある存在で、かつ変で、というところで注意をひかせよう。興味ない子を振り向かせるだけの根気と根性、刺されても大丈夫って言える強がりみたいなところも含めて、考え感るところはあります。

**岡崎**：同感です。コーディネーターとしても、学校に行くアーティストのパーソナリティは非常に重要だと考えていて、子どもたちを吸引する魅力が欠かせないと思っています。それぞれの芸術指標で得た確信から発せられる言葉は、本当に説得力があります。

今日は、学校とアーティストの双方から、教育現場におけるダンスの意義が語られました。と、同時に学校の日常にダンスを取り込むには、現場の先生のためのダンス教育の情報共有や学校のカリキュラムなどの運営上の課題も多いことが判りました。西寺尾小学校のような理解あるパートナーを少しずつ増やすためにも、アウトリーチの質をさらに上げていく必要があるでしょう。ダンスのみならず、ジャンルを越えてアーティストの手法を共有することで、アート教育のプログラム開発もできるのではとのヒントももらいました。これからアウトリーチの現場が増えてくと思うんですが、次世代の人たちも育っていくといい。ぜひ私たちの活動に参加してください。子どもたちがダンス/アートの楽しさを体験できるよう、これからも努力していきたいと思います。本日は長時間、どうもありがとうございます。



※1)横浜市芸術文化教育プラトフォーム:2004年からスタートした、子どものための芸術文化・教育事業。幅広い分野で活躍している芸術家が、直接学校へ出かけて「体験型プログラム」と「鑑賞型プログラム」を行っている。2014年度は市内134校で実施。

※2)「Dance Dance Dance @Yokohama2012」の次世代育成プロジェクトとして、2012年12月1日に開催した「はまっ子スポーツフェスティバル」第52回横浜市立小学校体育実技発表会(会場:横浜文化体育館)で表現リズム遊び/表現運動の発表を行う市内6校で、第一線で活躍する6人の振付家がダンスの授業を実施した。

#### ダンス教育ラボ vol.2

主催：スクール・オブ・ダンスプロジェクト、NPO法人Offsite Dance Project

共同主催：ヨコハマアートサイト事務局(ラボサイト)

助成：横浜市地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト 2014」、子どもゆめ基金  
後援：横浜市文化観光局、横浜市神奈川区文化センター かなっくホール

編集・発行：スクール・オブ・ダンスプロジェクト／2015年2月27日発行

E-mail:info@school-dance.jp <http://school-dance.jp>